

伊其相處

あれまあ ふでけて

贈之以勺蔡

勺蔡のフセゼント

この詩について高田真治『詩経』は次のように解釈する。

溱水は、鄭の郛城の西北から流れて城西で洧水に合流し、南に向い、潁水（河南）に入る。鄭国の士女の觀遊の勝地である。春になって氷が融け、まさに水が溢ちあふれる。このあたりに藤袴が多く生ずるので、あたかもこの時に当たって、男も女も藤袴を取りに遊びに出かける。女は男に向かつて、「觀に行きましょう」と誘う。男は暫しその誘いには応ぜず、「もう觀たから」とことわるが、女は更に「それでもまあ觀に行きましょうよ。洧水を離れた外の土地は、広くて楽しいことよ」と誘う。洧水のはとりは、人出が多くて雑沓するから、外の土地を孝けて、ゆつくりしたいと思うのである。かくて二人は、ふでけ戯れあって、別れに勺蔡の華を贈って、相手の好意に感謝するしるしとする。

姚際恆『詩経通論』は「且往觀乎。洧之外。洵訐且樂」もまた男のことばだとする。それなら拙訳は「でもさ、行ってみようか／洧のかわ向こうは／と、とても広くて楽しいぜ」と改めなければならぬ。この方がおもしろく実情にも近いのではないかと察するが、高田訳は毛伝に拠り、唐代には一般にその説が通用したことを考えれば、ここでもそれを基本にする。唐の孔穎達疏に、女の情急にして、又男に勧めて云う「且つ復た更に往き觀んか。我れ聞く『洧水の外は信に寛大にして且つ樂し』と」且つ相与に之を觀るべし」と。ここに於て士これに従う。これ士と女と、因つて即ち其れ相与に戲謔して夫婦の事を行う。その引るるに及んでや、士この女を

笑して之に贈送するに、芍薬の草を以てし、その恩信を結んで以て信約となす。男女は、淫に礼を以て配すべきに、いま淫佚かくの如し。故に之を陳して以て乱を刺す。

淫佚邪乱とするのは儒の道徳觀である。だが、男女の聚会は禮の起る以前の民俗であらう。『太平御覽』卷一八にいう。

雜詩事司に曰く。溱与洧。方渙渙兮。三月桃花水下の時を謂う。鄭國の俗、三月上巳、この水において招魂統魄し不祥を祓除するの政なり。

袂褻は漢代に起る風習で、この詩に当てるのは附会だという説もある。だが、『論語』先進に八褻容春服既に成り、冠者五六人童子六七人、沂に浴し舞雩に風し、詠じて帰らん、と云うのはたぶん上巳の袂褻なのである。招魂統魄、わが国のことばでいえば「魂振り」の行事に八夫婦の事を行つたかどうかを断定する力はないが、女の方から男を誘うこの詩によって、当時の鄭國の自由な氣風を察することができ、白川靜『福本詩経研究通論篇』にいう。

鄭は桓公の入殖によって建てられた国とされているが、その地は実は殷商の故地であり、その安陽箕都以前に久しきにわたっておそらくは首都であつたところである。鄭の入殖のとき、草萊を開いて始めて目したという子産の語左伝昭十六年はその意味において疑うべく、そこには殷商以来の職能的民族がなお多数残存し、器物の製作等に従事していたいわば手工業の中心地であつた。鄭の入殖の際にこれらの商人と殆んど契約國家に近い協定が鄭室との間に行われ、手工業者はその結果自治的な特權を享受していたようである。これはかれらの旧勢力がそのまま新しい入殖者によって承認されたことを意味し、鄭國の文化が決して鄭の入殖

にはじまるものでないことを示すものである。そういう古い文化的伝統と、宗国の滅亡による職能的氏族内部に進行した部民の解放が、この地に極めて自由な都市的雰囲気を生み出していたとみられる。鄭風の諸篇はこついつ背景から理解されるべきものであつて、ある意味においてそのことはまた邯鄲衛にも通ずるところがある。ただ邯鄲衛はかつての三監の叛などもあつて、周室あるいは入菑言たる衛室の規制力がなお強大なるものがあり、そこに君子諷頌の詩を生むと同時に、社会詩・生活詩を興すに至つたが、鄭は商人自治を原則として承認した国であるから、統治者の規制は緩慢であり、そういう詩が生れなかつた。その文化的伝統は古く、その社会生活は民族的繋絆がかなり自由であり、それが自ら都市的となつて民謡に反映してきている。女の誘引詩が多いということもそのためである。な自由蘭の古字といふべき蘭のうたわれる詩は『詩経』に見えること、それが一種の恋愛詩であることがわかつたが、「幽蘭」は見えない。「幽蘭」の文字の見える古い文献は楚辞の「離騷」だ。地上での不遇に失望した主人公が、天帝に会おうとして、空をさまよい、天門に近づいた。

紛總總其離合兮

斑陸離其上下

吾令帝閭開關兮

倚閭闔而望予

時暖暖其將寢兮

結幽蘭而延行

いりみだれつとい来てはたさりて

はらはらとのぼりゆきはたくだる

門垂に御門ひらけとわれの言えるに

御門に倚りてわれを見るのみ

くれぐれと日ははてんとす

幽蘭をむすびたらずむ

世溷濁而不分兮

世はにまじりわがちもみえず

好蔽美而嫉妬

よき人のよきを蔽いてねたみにくみぬ

天に之を容れられぬことをなげき、ト音にうらなわせる。ト音は遠遊せよ、とすすめるが

世幽昧以眩曜兮

世はくらくなまなくるめき

孰云察余之憂患

たれかわがよしあしを見わけなん

民好惡其不同兮

人の好むと憎むとは同じならねど

惟此黨人其独異

このやからことにあやしも

戶服又以爲憂兮

人ごとにあらくさを身につけて

賢幽蘭其不可佩

言いけらく幽蘭は佩るべからずと

このほか「悲回風」に

蘭茝幽而独芳

蘭と茝はかすかなりともひとり香ばし

の句があり「幽蘭」そのものではないが準じる例としてあげることができる。

王逸の注は、(1)について八言うところは、時世昏昧にして明君ある無し、周行罷極して賢士に

遇わず、故に芳草を結び、長立して還らんとする意あるなりVといい、(2)について八言うところは

は、楚國にては戸ごとに白蒿を服しその要帯に満て、もって芬芳なりとなし、かえって幽蘭は臭

悪と謂い佩るべからずとなすなり、もって君の讒佞を親愛し忠直を憎遠して肯て近づけざるを言

うなりVといい、(3)について八もって賢人の深山に居ると雖もその忠正の行を失わざるを言うV

(3)

(2)

(1)

という。この③の注によって「幽」が深居忠正の概念をふくみうる語であることが推察される。

「離騷」には、八秋蘭を紉いで以て佩となすV八朝には此の木蘭を奪りV八余既に蘭を滋うる
こと凡畝V……などと蘭字が多出し、木蘭は別種の植物だからおくとしても、それらはいずれも
可高く好ましい花として画かれる。しかし八時は簪紉として変易すノまた何ぞ以て淹留すべけん
やノ蘭正變じて芳しからずノ至意にして矛となるノ……ノ余は蘭を以て持むべしとなせりノああ
美なくして容のみ長しノ厥の美を變てて以て俗に従い、かりそめに家芳に列するを得たりVとう
たうように頼みがたい、頼みうるのは幽蘭だけなのだ。

宋玉の作と伝える「諷賦」に入せ……ろ蘭寺の室に受め、臣とその中に止む、中に鳴琴あり、
臣援りて之を鼓し、幽蘭白雪の曲をなすVという。「諷賦」そのものは好色文学に近いが、幽蘭
は清高のものとしているのである。

魏の曹植の「洛神賦」に、池上が八幽蘭の芳馥に微み、歩みて山隈に踟躕すVといい八辞を言
みて未だ吐かざるに、氣は幽蘭のごとしVという。すでに清高を起して、神秘的な妖美をも含む
ようである。

露といえは『詩經』召南に「行露」がある。

厭浥行露

しっとり 道の露

豈不夙夜

朝にも晩にもゆきたいけれど

謂行多露

道には露が多いので

誰謂雀無角

雀は角なしと誰かがいった

第一章

何以穿我屋

そんならなんてわたしの家を穴あける

誰謂女無家

あんたに家もつ気はないと誰かがいった

何以速我獄

そんならなんでわたしを裁判にかけるのか

雖速我獄

わたしを裁判にかけたって

室家不定

わたしと家もつ気もないのに

第二章

恋しい人のところへなら露にめれても通いたいが無理じいに弄ばうとするあんたのいうこと
なんか聞きますせん、という女の拒否をうたうのだとされる。鄭風「野有蔓草」にいう。

野有蔓草

野べに蔓くさ

零露漙兮

露しつとりと

有美一人

きれいなお方が

清揚婉兮

目もばっちり

邂逅相遇

めぐりあいたい

適我願兮

わたしのねがい

第三章

この露には相手の眉目の清冷とそれを見つめる人のこぼれるような思慕が結晶した美しさがある。

楚辞では「離騷」に八朝に木蘭の墜露を飲み、夕べに秋菊の落英を餐うといひ、九章「悲回風」に八溘露の浮涼を吸ひ凝霜の雰雰たるに漱ぐといひ、九辯に八白露既に百草に下り、奄奄離披として此の梧楸あり八秋既に先ず戒むるに白露を以てし、冬は又これに申めるに凝霜を以

てすVへ霜露慘憺として交も下り、心尚お夢に其れ清らすVと諫「初放にへ上げ履鞋にして露を防ぎ、下は冷冷として風来たるVなどの例がみえる。「洛神賦」には例がない。

「幽蘭露」というとき、いまのわたしはただちに鮮明なイメージを得る。そのイメージは書代の人がこの三字から得たイメージとそう変りはないかもしれない。ただ、「幽蘭」と「露」とを結合したのは、たぶん李賀がはじめで、結合する以前の文字に詩経・楚辭の用例のあることを賀が意識していたことは間違いない。露おく幽蘭のあるところには出現する蘇小小が、「洛神賦」における神女に相当することも、ほとんど疑いない。

ここまで書いてきてふと思いついて初雪の楊柳の「幽蘭露」を読んでみた。人惟れ幽蘭の芳草たる、天地の純精を禀け、青紫の奇色を抱く。……望は露を受けて將に低れんとし、香は風に決いて自ら遠し。……V わたしが引いたものより多くの古詩を参照して製作しており、幽蘭の概念をつかむには便利だが、この文章からは河のイメージも発出しない。李賀は「幽蘭賦」を読んではいたろうが「蘇小小歌」を作るときには定い出ししなかったのではないか。

さて「幽蘭の露が「如啼眼」とは、なっている目のようだ」ということであろう。啼は「説文」に八號也Vというように聲を放つてなくことに違いない。「左伝」定公十四年に見えるもの「文選」にあらわれる数例はみなそうである。口でなくへき啼がいつころ目と結びつくようになったのか、わたしは知らぬが、次のものはその目い例だろうか。「後漢書」梁竦伝にいう。

竦の妻の孫壽……色美にして言く妖惑をなし、愁眉・顰妝・墮烏鵲・折委蛇・顰面笑を伴し以て媚惑をなす。

啼処とは啼粧のことで、涙の「風俗通」に「目」の字を賦し、啼処の言くすVと明
する。啼処とは涙の流れた痕のことであろう。後漢にすでに涙を指す方向で用いられたにしても
啼はその後モロかうきを放つてなく方面で使用されることが多いので、啼眼といへば放つべき
声が鼻圧されたために、目から涙となつて滴出した感じを語う。蜀の詩では「如」という直喩法
でせきとめられるため、より一層その感じを強めているようだ。

六

無物結同心 煙花不堪剪

無物結同心が古詩の「何処結同心」Vから来ていることはいうまでもない。しかし二つの違いは
たいへん大きい。何処結同心なら、同心を結ぶべき処が、いくつもあるのだ。その一つは地下で
あるにしても、無物結同心では、同心を結ぶべき物がまったく無い。地上はもとより地下の物に
も。

「無物」は『孟子』告子上に「苟くも其の養を得ば、物として長ぜざる無く、苟くも其の養を
失わば、物として消せざる無しV、『文選』何晏「景福殿賦」に「宗廟の儲は、物として有らで
る無しVというのが古典における顕著な例で、その「無」は不を打消して積極的だが、蜀のは消
極というよりゼロなのである。

『玉台新詠集』に梁の武帝の「有所思」をのせる。

誰言生離久
適憶与君別
衣上芳猶在
襟裡書未減
腰中雙綺帶
夢爲同心結
常恐所思露
瑤華未忍折

生きわかれをしてスしいなどだがいふのか。
おまへと別れたときのことをちやうどおもひだす、
わたしの衣の上にはおまへの芳ばしさがまだある。
わたしの手のなかにはおまへの手紙の字はまだきえずにゐる。
おまへの腰の二筋のあやぎぬの帯、

わたしは夢の中でそれを同心結びにしてやった。

ただわたしがどんなにおまへを思つてゐるかといふことが外へあらはれさせ
めかといつても恐れてゐるので、

せつかながら折つてやりたいた瑤華もまた折りがねてゐる。(鈴木虎雄訳)
これは、男が、女を愛するそぶりではなく、男が結締する氣のないことをはつきり示した詩だ。『論語』にいうではないか。へ「營棟の花、偏として反せり、豈に尔を思わざらんや、至これ還ければなり」と。子曰く「未だこれと思わざるなり、それ何の遠きことかこれあらん」と。この女の立場に蘇小小がおかれていたとするならば、小小にとって同心を結ぶべきものは何もないわけだ。

ところで、へ瑤華未忍折は、雪のへ垣花不堪剪とよく似る。鈴木は「有所思」注にへ瑤華うつくしい花、楚辞に、折疎麻兮瑤華、將以遺乎離居とある、花をおくるは愛情のしるしといふ雪の二句はへこの願はなにかと同心結びをしたくおもつてゐるらしいが、結ぶべきあいての品物がなく、煙をおびた他の草花はきるねうちがないと試する。

蘭の同句、甚だ難解で、注家の説もわかれる。

露啼は是れ露、蘭露啼は是れ蘇小の露。生時は同心を解結せしが（あるいは、生時ハ同心ヲ結ブヲ解セシガ、と訓すべきガ）、今は物の結ぶ可き無し矣。物無キに非ざる也、總て惜花有れども已に自ら剪るに堪えざる也。（曾益）

仍に情有る人と共に同心を結ばんと欲すれども、而れども土花烟脂、采って贈るに堪えず。

（蘆伯言―陳本礼所引） 久しかうでること煙火中の花の如し（蘆憲策）

蘭露啼痕、心に不偶を傷み、風塵半落、此の折宕に堪う。（姚文燮）

同じ心のふたりを結ぶべき物なく、夕やみに包まれる花は贈ろうとしても切ることができぬ。（荒井健）

墓の傍の蘭花においた露珠は、さながら死者の涙眼と同様。死後は一切消滅してしまい、もはや同心を結ぶべきものはない。墳上の脆い露のような幽花は切りとって贈るに堪えない。（慕葱司）

「煙花」とは、ただ単に「もやにつつまれた花」ではなく、辞海などにいく普通に見られる「娼妓を比喻することば」であり、この場合ははかなく消えた蘇小の象徴なのである。……いとしい人と二世を契ったものはかない夢。慕いよる心を結ぶ糸もなく、娼妓の私は、身受けられぬままにはかない身となってしまった。（横山伊勢雄）

ちぎりを結ぶしとてゆかりのものもありはせぬ。薄露に花のぼかしの色模様、剪んで着物になりはせぬ。・無物結同心 男女の心が一つになつた誓いのしるしのもの。今はそれが

ない。・煙花 春がすみ花、野山の風情をしめす、それは絹のように見えるが、剪んで贈り物にはできない。(斎藤暁)

わたしはこの二句を△透げんすべなき契りゆえ　なおたちがたき恋いごころ△と『方向』二号で訳し、その△恋いごころ△を『幽歎集』で△よるのはな△と改め、維持してきたが、近ごろまた迷っている。右にあげた説のうち横山説との距離がもっとも近いだろう。

「不堪剪」をわたしは△ななおたちがたき△と訳したのは梁武帝の△瑤華未忍折△が頭にあったからだろうと思う。「未忍剪」あるいは「不忍剪」ならば、拙訳を動かす必要はあるまい。だが「未忍」あるいは「不忍」と「不堪」とは違ふのだ。その違いを、鈴木訳のように△しかねる△と△入するねうちがない△と整理すれば一往はつきりする。けれども算には、「官街柳帯不堪折、早晚露浦勝綰結」(河南府試十二月樂辞正月)の句があり、その不堪折は折るねうちがないのではなく、折りかねるのであり、ほとんど不忍折と同じ意である。それならば「煙花不堪剪」もまた不忍剪の方向で算が癡想しなかったとはいいい切れぬ。

「官街の柳帯は折るに堪えず、早晚露浦綰結するに勝せん」とは、まもなく菖蒲のように結べるだろうから、いまはまだ幼い柳を折らずにおこう、というほどの意。近い未来の恋の成就の可能性を期待して、今の成就を豫当しているのだ。「蘇小歌」では「物の同心を結ぶ無し」で、恋の成就の可能性はまったく無く、それは現在だけでなく未来もなのである。それならば「煙花不堪剪」は、煙花は剪るねうちがないのではなく、剪りとっても無駄なのではないだろうか。

姚佳は次のようにいう。

この句は本づく所あり。紫玉死す。韓重往きて弔す。玉の形あらわれ。夫婦の情を尽す。これに径寸の珠を贈る。重、吳王に詣り、其の事を説く。王、大怒し、重を収う。王、ちまち王にまみえ、冢を發くがためならざるを申理す。(王の一人これ聞き、出でてこれを抱かんとす。正に煙の如く然り。これ煙花剪るに堪えざるなり。

話は二十卷本『搜神記』卷十六に見え、紫玉とは吳王夫差のむすめ、韓重はその恋人だが、夫差がふたりの結婚を許さないで紫玉が死ぬのだ。

煙のように消えうせるのを「煙花不壞剪」に結びつけるのは尤もらしいが、紫玉は墓中で韓重と結婚したのだ。生きながらの契りではないにしてもまずはめでたして「無物結同心」ではない。煙花とはいったい何だろう。「文選」鮑照「舞鶴賦」に「人猶丹を含んで星曜、頂は紫を疑うして煙華」とあるのが早い例に属するようだ。この煙華は「煙のごと華やぐ」とでも訓するのであろう。孫逖「宿雲門寺閣」に「杏閣東山下、煙花象外幽なり」、李白「黃鶴樓送孟浩然之廣陵」に「故人西のかた黃鶴樓を辞し、煙花三月揚州に下る」、杜甫「傷春」に「閑窓三千里、煙花一万里」はいずれもがすみと花をさすらしく、斎藤注が「春がすみ花」というのはこれらの例を顧慮してのことかもしれぬ。杜甫「清明」に「秦城樓閣煙花の裏、漢主山河錦繡中」は紫華といふほどの意であらう。晩唐の章藻が「閨怨」に「人塞上に煙花なし、寧ろ妾が顔色を思わん」は妖女をさすのだそうである。單はそれらのいずれかと共通する使いかたをしているのだろうか。單は「蘇小小歌」以外の作品で「煙」(または「烟」)字を四十六回使用していて、「けむり」「水蒸気」「雲・霧・霞・露など」「ほこり」などの意で、「煙」という字がごく普通に人々の

間で用いられる意味内容である。「蘇小小歌」のはあいもたぶん同様であろう。

「煙花」は前掲の諸詩人の例では春のものとされるが、賀が「煙」字を使うのはあい春だけでなく秋と結ぶことが多いので「蘇小小歌」の煙花を八春がすむ花Vというのは問題であろう。

すいぶん周辺をうろついたが、「煙花」即ちこれだといいうるほどに限局決定しうる要素を見つけなかった。賀の「煙」字の使用法からいって、「もやにつつまれた花」あるいは「霧のような花」というほどの意にとるのがおだやかであろう。かれは「煙」字の価値を否定する方向では使っていないから「土花煙暗」というのはそぐぬ気がする。鮑照の前引の句の少し後に「煙交り霧疑って毛簪なきがごとく、風去り雨還って鼓送すべからず」といって、李善の注によれば、鶯は毛羽と同色の煙霧にあえは消えてなくなったようであり、雨風がやめばその色がよいよ、淨らかでことばにつくしがたい、というほどの意、賀が「土花煙暗」の句をもつ以上その作を熟玩していたことは明らかで、句のよさに通えぬよりも鮮かにあらわれるイメージを幽蘭煙花に彷彿する蘇小小に移さなかったはずはない。

煙花を幽蘭と対立させ、土花煙暗の方向で解釈するのは、「詩經」が蘭と芍薬を対立し、楚辭に艾と幽蘭を取舍して以来、伝統のあることだから、それはそれで賀の詩中でも伴奏のように響いているだろうが、曹植にとっての幽蘭が洛神のひそむ場所であったように、賀にとつての幽蘭もまた蘇小小のひそむ場所ならば、賀の「煙花」を、植の「椒塗の郁烈、薝蔔の流芳」の椒薝とおなじく、ともに含みあうもので対立しない。

「詩經」召南「甘棠」にいう。

蔽市甘棠

ふっさりカタナシ

勿翦勿伐

摘むな割すな

召伯所爰

召伯さまの思おもまれたとこ

召伯は、周公旦と共に周の成王をたすけた召公奭。召公が郷邑を巡行したとき、カタナシの木の下で男女の訴えを聴き裁決したので、人々がその恵政を慕って、その木にその人をしのび「剪るな」とうたったのだ、といわれる。

「翦」は「剪」とおなじ。「剪るな」とは、剪るに忍びないからで、翼の「正月」の「不堪折」の意。それならば「煙花不堪剪」もまた「甘棠」に「翦るなかれ」という方向で、剪るに忍びないというのではないだろうか。

蘇小小の恋は無物結同心で完成の可能性は現在にも未来にも無い。しかし過去においては愛あるいはそれに似たものを示されたのであろう。それが彼女を恋にみちびいたのであろう。その愛あるいは愛に似たものは消えても、そのゆかりの花はのこっている。それが幽蘭煙花であらう。幽蘭煙花もまた同心を結ぶべき物ではない。死んだ蘇小小の体も死にきれずにさまよう魂魄もがそうであるように。

それらが同心を結ぶべきものでないことは、たれよりも蘇小小が、重々知っていることである。彼女は無垢無知の処女ではない。醒めた理性は、女を夢中にさせて逃げた男が、かれを待つ女のもとに金輪際帰って来ないことを、知りつくしている。にもかかわらず、醒めた理性なんぞの忠告に目を傾けかねる願いが、万に一つもありえぬかれのやって来る時を待ち、かれの求めのが天